

2013年3月 田中遥様（東京慈恵会医科大学3年）

今日は在宅医療に同行させていただき有難うございました。これぞ診療という場面を多く見させていただき、自分も先生のような熱い先生になりたいと強く感じました。

自分の大学の好意は「病気を見ずして病人を診よ」というのですが、この言葉の本質を深く考える機会でした。

時間をかけてひとつひとつ丁寧に行われる診療はまさに診療でした。一軒当たり約30分の訪問がされていましたが、その中で医療行為を行う時間はほんの数分でして、それ以外にご本人、ひいてはご家族とのお話に向けられていたということは普段の生活からすると、驚きでありました。

仮に同じ病名だったとしても、それぞれの家に個人とそしてご家族の様々なストーリーがあり、個人が病気になったときに関わりがあるのは本人だけでなく、家族もそうであるということを強く感じました。「人間は一人で生きているのではなく社会の中で生きている」事を当たり前のことながら痛感しました。

診療の「療」という字は「癒す」という語源があるという一節がありますが、先生方とお話されたご家族の方の表情はまさに癒しや救いを得られていたように見えました。病気を治す、病原を取り除くことだけが医療ではないとひしひしと感じました。大きな刺激を複数受けさせていただいたばかりの、今、真の意味で「人を治す」ためにはどのようにしたら良いのかと考えてしまいます。知識が必要ということは言うまでもないですが、しかしそれ以上に「医師として人間としてどうあるべきか」を考えてしまいます。

人の気持ちを汲み取り、紡ぎ出し、支え、、、病気はすぐに治るものではないけど、しかしそれ以上に大事である、心が治る瞬間を30分で作り上げる診療、とても熱い場面を見させていただきました。私もそのような熱い医師になりたいです。

今日の最終日に、在宅医療の現場に同行させていただいたことは、インターンの集大成になり、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

とても長くなってしまいました。まだまだ溢れ出しそうな気持ちでいっぱい、本当にそのような経験をさせていただき有難うございました。

遠矢先生は私にとって、幼い頃からお世話になっている、いとこのお父さんのような感覚で、こんなにすごい先生だったのかということに、とても恐縮な気持ちになってしまいました（笑）。このような恵まれた環境の中で、それから子供世代の私はどうするのか、という事が求められていると思います。環境に感謝しつつ、しっかりと足場を固めながら、大きく成長して、私も「人を癒す」医療者になりたいです。今日は本当に有難うございました。